

藍住町の板碑

—— 考古班（徳島考古学研究グループ） ——

岡山真知子^{*1} 小林 勝美^{*2} 三宅 良明^{*3}

1. はじめに

板碑とは、石製の卒塔婆のことで、中世に造立され、分布の中心地の一つに阿波国があるという独特の考古遺物である。中世阿波の中心地でもある藍住町の板碑を調査することは、中世阿波解明の手段ともなりうる。そこで、今回の調査のテーマとした。

藍住町の板碑についての研究は、『板野郡誌』¹⁾や『藍住町史』²⁾に散見する程度である。前者には、

旧住吉村で3基の板碑の存在が記録されている。後者には、10基の板碑の存在が記述されている。今回、『藍住町史』の記述をもとに調査を行ったが、確認できたのは5基である。『藍住町史』記述以外に、新たに1基を発見し、1基が発掘調査で出土していることを教えていただいた。これを併せて今回の調査では合計7基を確認したにとどまる。

そこで、今回の調査は確認した7基の板碑の実測調査・拓本・写真撮影を行った。



図1 藍住町における板碑の所在

*1 徳島県立城ノ内高等学校教諭 *2 阿波学会会長 *3 徳島市教育委員会社会教育課

表1 藍住町の板碑一覧

No.	所在地	種類	枠線	二線	長さ	幅	厚さ	銘文	備考	参考文献
1	藍住町矢上春日144-1 木南宅	五大種子板碑	有	有	125.0	43.0	8.0	判読不能	上半部欠損	藍住町史
2	藍住町勝瑞阿弥陀橋	阿弥陀一尊板碑	有	1本	112.0	42.5	8.0		蓮華座	板野郡誌・藍住町史
3	藍住町矢上江ノ口	阿弥陀三尊板碑	有	有	51.0	20.0	5.5			藍住町史
4	藍住町住吉字逆藤60福成寺	阿弥陀三尊板碑	有	有	65.5	18.2	3.0			藍住町史
5	藍住町住吉字逆藤60福成寺	地藏画像板碑	有	有	65.8	19.5	5.0			
6	藍住町奥野前川 東条家屋敷内墓地	阿弥陀三尊板碑	有	有	85.0	25.5	4.5	応永?	花瓶	板野郡誌・藍住町史
7	藍住町勝瑞守護町 勝瑞館遺跡第2次調査	不明	有	有	不明	不明	不明		16C中葉	

(長さ・幅・厚さの単位はcm)

2. 藍住町における板碑の調査

1) 調査の経過

期 日：2005年7月30日(土)、31日(日)

調査員：三宅良明、小林勝美、岡山真知子

調査協力：藍住町教育委員会

内 容：藍住町所在の板碑の所在確認と、7基の板碑の実測調査を実施した。

2) 藍住町の板碑の分布

藍住町で確認した7基の板碑を分布で見ると、矢上で2基、住吉で2基、奥野で1基、勝瑞で2基ある。板碑の石材はすべて結晶片岩である。なお、所在地については図1、内容については表1に示した。

3. 各板碑

1) 矢上春日五大種子板碑(図2-1)

矢上春日の木南氏宅隅に立てられている板碑である。右上半部が壊れているが、中央部に五大種子(𠄎[ア]・𠄎[バ]・𠄎[ラ]・𠄎[カ]・𠄎[キヤ])が描かれている。長さ125.0cm・幅43.0cm・厚さ8.0cmを測る大形の板碑である。よく見ると、右端には何かの文字の痕跡が認められ、本来は紀年銘があったと考えられる。

2) 阿弥陀橋阿弥陀一尊種子板碑(図2-2)

勝瑞阿弥陀橋沿いの祠に安置されている板碑で、藍住町文化財に指定されている。長さ112.0cm・幅

42.5cm・厚さ8.0cmを測る大形の板碑である。枠線の中の上半部に、阿弥陀一尊種子(𠄎[キリーク])を大きく刻み、その下に蓮台の様子が彫られ、さらにその下に「南無阿弥陀仏」の名号が記されている。

𠄎[キリーク]の種子から年代を考えてみる。𠄎[キリーク]は、𠄎[カ]・𠄎[ラ]・𠄎[イー]・𠄎[ク]を合成したものであり、小沢1967によれば、𠄎[カ]の横幅を基準として𠄎[イー]の長さの比が大きくなるほど古くなる。この年代観からは南北朝期の特徴であるといえる。が、𠄎[イー]の右下の筆の力の抜き方での形式分類では第四形式の室町期と考えられる。

また、同様に小沢1967の蓮台(蓮華座)の年代では、かなり模様化しており、第三形式と考えられる。第三形式は全時代を通じて存在するが、具象的でない点から、室町期と考えるのが妥当である。

以上の考察から、阿弥陀橋阿弥陀一尊は、室町期に位置づけるのが妥当であろう。

しかし、このように梵字と名号の組み合わせは少ないので、貴重な板碑といえる。管見の範囲では、徳島県内では2例目である。

3) 江ノ口阿弥陀三尊板碑(図3-3)

矢上江ノ口に祠が建てられ、その中に仏像と並んで立てられている阿弥陀三尊種子(𠄎[キリーク]・𠄎[サ]・𠄎[サク])板碑である。長さ51.0cm・幅20.0cm・厚さ5.5cmを測る中形の板碑である。表面がかなり摩滅している状況である。

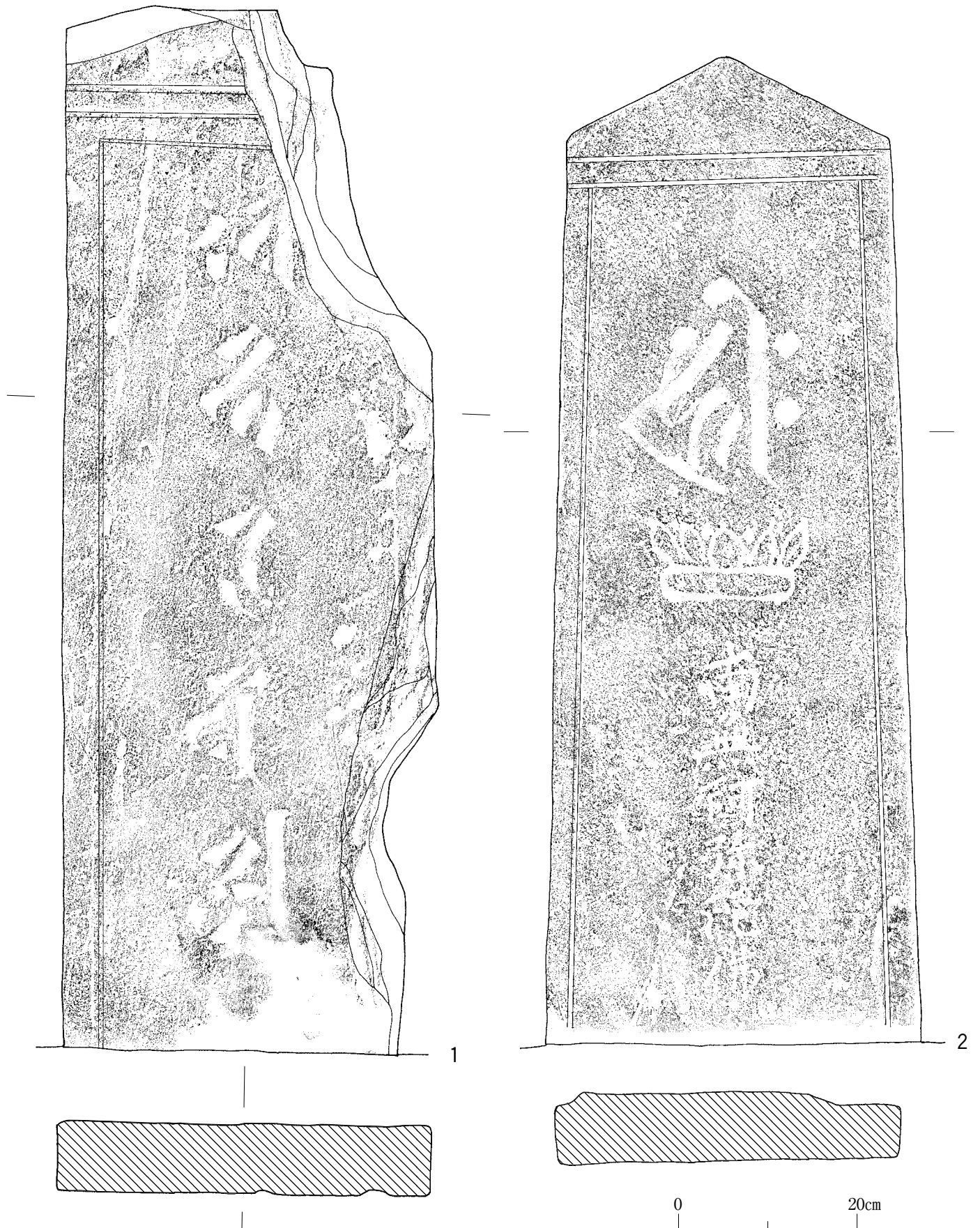


図2 藍住町の板碑実測図 No.1 (1 : 6)

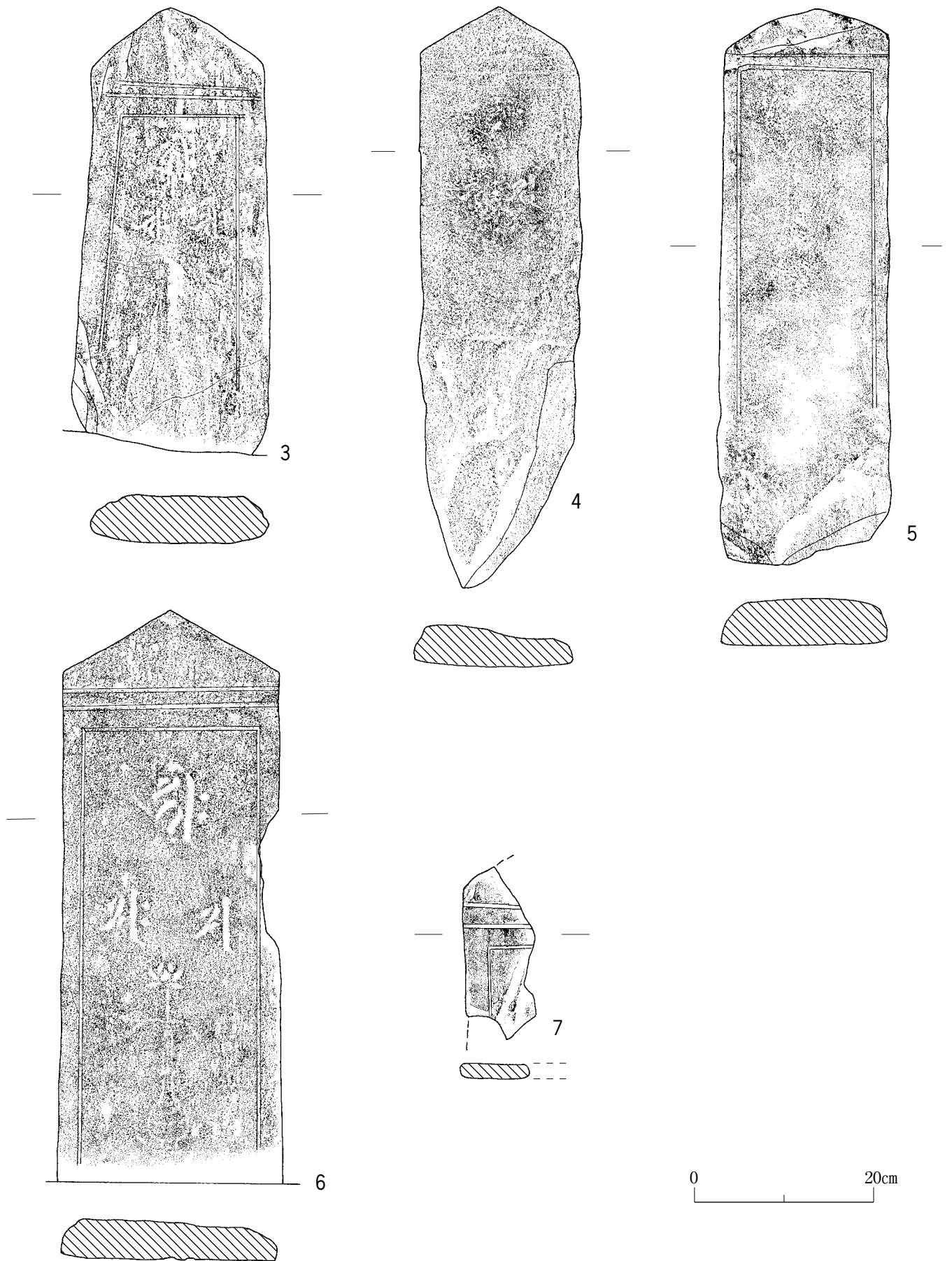


図3 藍住町の板碑実測図 No.2 (1:6)

4) 福成寺の板碑 (図3-4・5)

住吉字逆藤の福成寺に入ってすぐ右手に地藏堂が建てられている。この中に2基の板碑が存在するのが確認された。

No.4は、阿弥陀三尊種子板碑で、長さ65.5cm・幅18.2cm・厚さ3.0cmを測る中形の板碑である。上半部に阿弥陀三尊種子が描かれている。

No.5は、長さ65.8cm・幅19.5cm・厚さ5.0cmを測る中形の板碑である。今回の調査で発見された板碑で、全体に地藏画像が線刻で彫られている。表面の摩滅がひどいので、最初は何も見えなかったが、拓本をとるために水にぬらしたところ、光背と錫杖がみえたので、地藏画像板碑と判断した。地藏画像板碑は徳島県内では17例目と類例が少ないので、貴重な板碑といえる。

5) 奥野の阿弥陀三尊板碑 (図3-6)

奥野前川の東條氏宅裏の墓地隅に立てられている板碑である。長さ85.0cm・幅25.5cm・厚さ4.5cmを測る中形の板碑である。枠線の中の上半部に、阿弥陀三尊種子を刻み、その下に花瓶が線刻で彫られている。花瓶の右に何かの文字が見える。現在は読めない

いが、『藍住町史』にこの板碑の紀年銘として「応永」との記述があり、応永年間(1394~1427年)と考えられる可能性がある。

また、花瓶が徳利形³⁾で、徳利の中には1茎の花と1対の葉が描かれている。このような描き方は、上坂編年⁴⁾によると、A型であり、14世紀中頃までしかみられない南北朝期の特徴を示している。

また、類例として、神山町阿野峯長瀬の阿弥陀三尊種子板碑が挙げられる。この板碑は、長さ78.0cm・幅27.0cm・厚さ3.0cmで、「応永廿六年七月廿二日」の銘がある。

この板碑の造立時期であるが、花瓶の点からは南北朝期と考えられる。しかし、板碑の大きさも85cmしかなく、室町の初期と考えるのが妥当ではないかと考えられる。

6) 守護町勝瑞館遺跡出土板碑 (図3-7)

守護町勝瑞館遺跡第2次調査で出土した板碑であるが、小破片のため詳細は不明である。ただし、この板碑が調査担当者の重見氏のご教示のよれば、16世紀中葉の層から出土したとのことである。少なくともこの時期には造立されていたことがわかる。

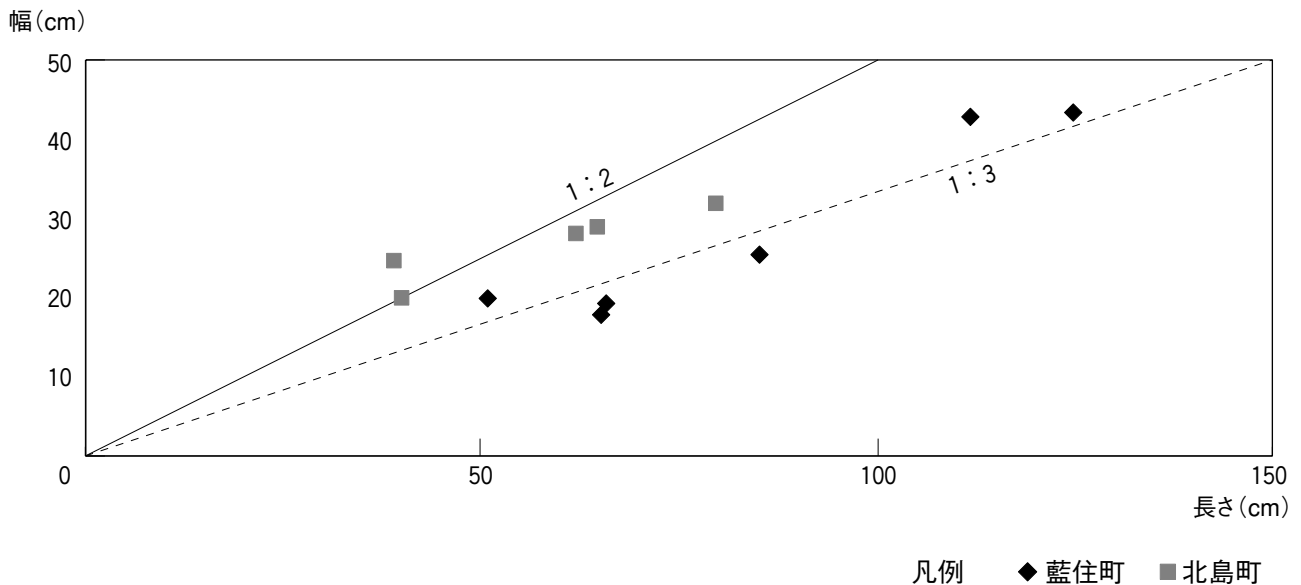


図4 藍住町・北島町の板碑の大きさ

4. まとめ

1) 特徴

藍住町の板碑で、標識が確認できるのは6基である。内訳は、阿弥陀三尊板碑が3基、阿弥陀一尊板碑が1基、五大種子板碑が1基、地藏画像板碑が1基である。隣接する北島町は、阿弥陀三尊板碑が1基、阿弥陀一尊板碑が3基、阿弥陀画像板碑が1基であり、同じ傾向を示していると言える。板碑の大きさは、図4に北島町とともに示したが、藍住町板碑の方が細長い傾向にある。

非常に特徴的な板碑として、阿弥陀橋の阿弥陀一尊板碑と福成寺の地藏画像板碑があげられる。ここで、この2つの板碑の類例を検討する。

2) 阿弥陀一尊板碑と名号板碑の複合例

紀年銘板碑のなかで、名号板碑と他の種子の複合例を調べると、1例だけ類例があった。それは、吉野川市（旧麻植郡美郷村）榎谷の地藏堂内六角形地神碑前の板碑（図5参照）である。これは、名号に阿弥陀三尊種子を組み合わせた例である。明応五（1496）年閏二月四日の紀年銘があり、長さ134.9cm・幅46.7cmの大形板碑である。ただし、この板碑は名号が中心にあり、その上に月輪の中に阿弥陀三尊種子と蓮華座を描いている。これに対して、藍住町例は、阿弥陀一尊種子を大きく中央に描き、その下に蓮華座と名号を彫り込んでいる。どちらが中心の標識かという点、美郷例が名号であるのに対して、藍住例は阿弥陀一尊種子であるの一目瞭然である。

表2 徳島県地藏画像板碑一覧

No.	年	長さ	幅	厚さ	所在地	二線	枠線	紀年銘・備考
1	1331	113.0	25.0	5.0	名東郡佐那河内村仁井田	有	有	為逆修善根尼阿廻向也元徳三年八月廿五日敬白
2	1340	106.0	24.0	5.0	名西郡神山町神領字大埜地	有	有	為□□□□小野地□□曆応□年月日敬白
3	1392	64.0	17.0	2.8	海部郡日和佐町赤松字栗作青木宅	有	有	明徳三年二月廿三日 妙禪尼也
4	1390	135.0	45.0	6.0	徳島市入田町堀田 地藏堂	有	有	右志者逆修菩薩□□□□□如法如□□□□意趣□□□衆 明徳元年八月時正
5	1390	140.0	38.0	7.0	海部郡海部町大字芝字野江地藏寺	無	無	右志者為逆修結衆等 奉造立供養各敬白 明徳元年十月 日
6	1390	158.0	43.0	5.0	名西郡神山町広野字馬地 地藏堂	有	有	□□志者為逆修善根□□□ 干時明徳元年庚午十月日敬白
7	1390	174.0	45.0	5.5	名西郡神山町広野字嫁河内墓地	有	有	右志者為逆修菩提十二人也 明徳元年□月日敬白
8	1393	100.0	30.0	4.0	那賀郡鷺敷町中山 森家地藏堂	有	有	明徳四年□□□□□
9	1404	-	-	-	麻植郡川島町学 御迦藍堂			応永十一年
10	1559	64.0	27.0	4.0	鳴門市大麻町池谷 東林院本殿内	有	有	□□□逆修也 永禄二年二月九日
11	-	103.0	48.0	7.0	名西郡神山町広野五反地通学橋北詰	有	有	なし
12	-	69.0	35.5	7.0	名西郡神山町阿川駒坂地藏堂	有		摩滅
13	-	80.0	16.7	5.0	海部郡日和佐町西河内月輪1号板碑	有	有	なし、「日和佐町の板碑」
14	-	98.0	15.0	6.0	海部郡日和佐町西河内月輪2号板碑	無	無	なし、「日和佐町の板碑」
15	-				海部郡穴喰町			筆者実見、日和佐の月輪例と共通
16	-				鳴門市大麻町池谷 宝幢寺			『板碑の美』所収
17	-	112.0	42.5	8.0	板野郡藍住町勝瑞阿弥陀橋	有	有	なし

(長さ・幅・厚さの単位はcm)

また、名号板碑は、徳島県内で全板碑数の5%しかみられない板碑である。名号板碑が比較的多いのが石井町であり、『石井町の板碑』⁵⁾によると、名号板碑が49基も確認され、標識の33%を占めているが、複合例はみられない。以上からも、藍住町阿弥陀橋阿弥陀一尊種子板碑は非常に珍しい例であるといえる。

3) 徳島県内の地蔵画像板碑

徳島県内で、地蔵画像板碑と確認できるのは、この板碑を加えて17例である。かつて、岡山・三宅2002では、紀年銘板碑に限って10例を紹介した。この他、少し意匠の異なる地蔵画像板碑が県南部などで3基確認されている。これを含めると、15例である。ここで、これらの板碑を表にまとめると、表2となる。

地蔵画像板碑の初現は、元徳3(1331)年佐那河内村仁井田の地蔵画像板碑である。その後、明徳年間(1390年~1393)年に5基と集中的にみられ、終末は応永11(1404)年と永禄2(1559)年である。

藍住町福成寺の地蔵画像板碑は、日和佐町青木家の双式板碑(図6参照)や神山町広野字嫁河内の地蔵画像板碑と共通性が高い。以上から、福成寺の地蔵画像板碑は、14世紀の終末につくられた板碑の可能性が高く、15世紀前半までの範囲と考えられる。

4) 藍住町の板碑の意義

阿波中世の中心的位置を占めていた藍住に板碑があまりにも少ないのは意外であった。以前から指摘されているように、徳島城下町建設の際に、寺町が移転したが、その際に板碑も移動したのではないかと考えられる。一例として、次の例がある。『阿波板碑の研究』⁶⁾によれば「徳島市寺町の浄智寺・還国寺の双式板碑はもとは旧住吉村字勝瑞の還国寺墓地にあったものが同寺の現在地移転とともに移された」とある。こうした例が、他にもあるのか、検証したい。いずれにしても、阿弥陀橋の阿弥陀一尊板碑は、名号を複合する類例の少ない板碑であり、福成寺の地蔵画像板碑も少ない事例である。こうした貴重な石造文化財である板碑が、『藍住町史』編集後のわずか40年で5基も行方不明になっている。

今後、貴重な文化財が損なわれることのないように保護をお願いしたい。

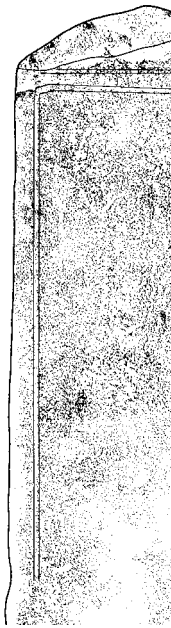


図5 榎谷地蔵堂名号板碑

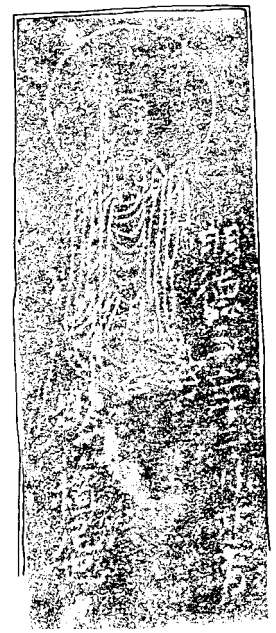


図6 日和佐町地蔵画像板碑



図7 浄智寺・還国寺の双式板碑 (『板碑概説』)

注

- 1) 板野郡誌：徳島県板野郡教育會編集、大正15年発行。
- 2) 藍住町史：藍住町誌編集委員会、昭和40年発行。
- 3) 上坂悟「板碑にみられる仏具」『板碑の総合的研究Ⅰ総論編』柏書房、1983年発行。
- 4) 上坂悟「板碑にみられる仏具」前掲書。
- 5) 石井町板碑悉皆調査会編『石井町の板碑』石井町教育委員会、2004年発行。
- 6) 沖野舜二『阿波板碑の研究—序説—』小宮山書店、昭和32年発行。

参考文献

- 藍住町誌編集委員会『藍住町史』、昭和40年発行。
石井町板碑悉皆調査会編『石井町の板碑』石井町教育委員会、2004年発行。
上坂悟「板碑にみられる仏具」『板碑の総合的研究Ⅰ総論編』柏書房、1983年発行。
徳島県板野郡教育會編集『板野郡誌』、大正15年発行。
岡山真知子・三宅良明「佐那河内村の板碑」『阿波学会紀要』第48号、2002年発行。
沖野舜二『阿波板碑の研究—序説—』小宮山書店、昭和32年発行。
小沢国平『板碑入門』隣人社、昭和42年発行。
服部清道『板碑概説』角川書店、昭和47年発行。